

1. 教育の責任

日本のグローバル化に対応できる看護師を養成するために、日本人および共に暮らす多様な人々がもつ背景を理解し、適切な医療や看護が提供できるよう支援や看護ができる看護師を養成している。

2. 教育の理念

私は、専門職として、生涯学習を継続できる人材を育成したいと考えている。そのために一生役に立つ学び方を体感してもらうことを念頭に、講義を計画・組み立てを目指している。

【理念を抱いた経緯】

日本では、血管外科病棟および NICU で勤務し、オーストラリアでは NICU で看護師として勤務した。オーストラリアの看護大学で講義、演習、実習を行い、その後就職し勤務した経験が、教育とはどうあるべきかという私自身の概念を形作っている。講義内容自体は、日本で受けた看護教育と同様であったが、教育における学生のかかわり方が大きく異なっていた。日本では、プリントは常に配布され、評価は、定期試験を受けるという 1 種類であることが多かった。オーストラリアでは、科目の評価は、一般的に、レポート、プレゼンテーション、ディベートがセットになっていることが多く、到達レベルは学会発表、論文作成に通じるものであったと感じている。シラバス、講義資料は学生が個々人でダウンロードし、読み込み理解をする前提であるため、教員から事細かに説明はない。自分で不明な点があれば、どんどん質問をするという方法で、教員とは常にメールでやりとりし、面談を繰り返すことで、教員が意図している課題達成に近づいているか学生自身が行動を起こし、確認するという方法であった。大学でレポートの書き方、プレゼンテーションのやり方を教わることはなく、大学準備コースでこれらのアカデミックスキルについて集中的に教育を受けた。つまりは、大学に入学する時点で、現地の学生は、大学の課題をこなす、アカデミックスキルをすでに身につけていることを知った。レポートを作成する際に、政府の統計データを引用するのは当然のスキルであり、アーギュメンティブエッセイが主流であるため、根拠を持った自分の主張、および、反対意見への理解とそれに対する根拠を持った反論を展開するレポートを書かなければならず、クリティカルシンキングを確実に行う必要がある。与えられた課題に対して、学生自身が意味を咀嚼し、質の高いものに近づけるために、あらゆる努力を行う経験をしたことで、社会人に必要とされている「自ら課題を発見する力」「常に問題意識を持つ力」「多面的に思考する力」「根拠を持って主張する力」が、大学の学習の中で培われることを知り、そうあるべきだと実感した。実習に一緒に行った現地の看護学生たちは、実習の場でも、指導者である看護師とチームで動くことができ、自分の意見を明確に主張することができていたことは、大学内での学習行動をみても納得できる。このような経験から、複雑多岐にわたる保健・医療の世界で、専門職として生き残る力を学生に身につけてもらうためには、学習を自分のものとして、生涯継続できる力を大学在学中に体感してもらう必要があると考え、上記の理念を持つに至った。この理念に基づき実装していくことが、本学部の教育の責任をはたし、3つのポリシーにそった教育活動になると考えている。

【カリキュラムポリシー（通学課程全体・通信課程）における担当科目の役割】

人間を生涯発達する存在としてとらえる基礎的な科目ととらえ、「こども」に関する基礎的な知識を教授するとともに、その理解が、「人間」ととらえるうえでどのように役立つのか、かつ、学生のキャリア、人生にどう影響するのかについて教授する。医療施設、地域、国を越えて、こどもとその家族への支援を行うことで、「個」を尊重しつつ、多様性に対応できる倫理的な姿勢の涵養をはかる。

【今年度実施科目の概要】

小児看護学概論 多様性とこども 小児看護学援助論 I、II、小児看護学実習

【小児看護学領域のミッション】

前ページに示した、「Otemae castle」モデルは、「学士力」「実践力」「国際力」を4年間で獲得するために、小児看護学領域で学生が学習・実践できることを図式化している。教員のミッション、行動指針も示し、学生へのかかわり方を領域内で共有しており、シラバス、教育実践はこのモデルに基づいて実施している。学生にも各科目のコースガイダンスの際に、コースガイダンスを配布し、どこを目指し、自分がいる位置、何をすべきかを明示している。

3. 教育の方法

教育の目的と目標

1. 難しいことに取り組んでみよう挑戦できる

卒業生のほとんどが成人領域に就職することから、小児看護学領域の科目は、国家試験合格するためにだけの科目と認識されることが多い。また、近年の少子化の影響で、身近に子どもがいない、関わった経験が少ないもしくは皆無であることから苦手意識を持つ学生も増加している。学生は「小児看護学」を、なんとなく「難しい科目」ととらえられている。しかしながら、人は誰でもこども時代を体験していること、その体験が成人期になっても影響していることから、「小児看護学」の理解は、重要であると言える。そのため、講義内で教授した知識を生かして、地域で子どもを観察するフィールドワークを行い、実際の子どもの見て、知識を深めることで、実感として子どもを理解する仕掛けをしている。また、ジグソー学習を取り入れることで、膨大な量の知識の理解を学生同士で、理解・共有し、学習をすすめていく方法をとる。

2. 学生が自分の可能性に気づくことができる（やればできる）

課題は、グローバルスタンダード（レポート、プレゼンテーション、ディベート、定期試験の組み合わせ）を鑑み、取入れる。学生には、それぞれ得手不得手があり、いろんな能力を発揮できる課題を準備するべきである。高い評価が得られる課題もあればそうでない課題もあるため、得意な課題に力を入れられるようにする。さらに、不得意な課題についても、ルーブリック評価を示し、最低限のラインを示す。カリキュラムや時間割の関係上、十分な時間が取れないことを考慮し、個人の課題は、教科書を見ればできるもの、もしくは、自分の考えを述べればよいものとし、なるべく新規に文献検索を大量にしなくてよいように設定している。取り組む前は、「できるかな」と思える課題でも、取り組むうちに、「できそう」と思える難易度に設定している。創造性を必要とする、明確な根拠が必要となる課題は、グループワークとして設定し、学生同士でサポートしあうことで達成できる課題とする。講義初回時に、「できないのではないか」と思っても、各講義で、方向性を示し、励まし、いつでも相談に来てよいことを伝えることで、「できるかもしれない」に変わる工夫をしている。この体験が「もっとできるかもしれない」と自分の限界を自分で取り払うきっかけになることを目指す。

3. 自分の学びの方向性が適切であると安心感を持てる

設定した課題や、講義進行は、従来の日本での教育スタイルとは異なっているため、学生の混乱が予測できる。そのため「今何をやっているのか」「これは何の役に立つのか」という疑問を持ったままでは学習への動機付けが失われてしまう。それを避けるため、基礎的な知識は小テストで常に確認をする。また、事例への取り組みや視聴覚教材を使用した際には、まず学生がどのように感じたか、考えたかを先にアウトプットしてもらう。その上で、教員の見解、ねらい、学習目標を伝え、方向性を示す。

4. 学習に集中できる環境づくり

講義進行は常に同じ流れにすることで、学生にとって、この後になにがくるという予測が容易になる。講義最後10分は必ず振り返りの時間として確保し、学びを省察できるようにする。また、終了時間を厳守することで学生の時間を尊重する。常に学生を気遣い、提出されたものに対して、よくできている部分を率直にフィードバックする。また、講義の振り返りについて、理解が深まっていることを確認できることで、教員自身も励まされていることを伝え、講義は、教員—学生の双方向で成り立っていることを伝える努力する。

教育実践

(1) 教育実践の工夫

- 1) 関心を高める工夫
 - ① 教員が話すのは45分程度とする（講義形式として）
 - ② 必ず講義の学習目標に関連した視聴覚教材を用いる
 - ③ 実践的な事例に取り組んでもらう（習っておらず、専門的と思える内容でも）
 - ④ 英語のみの教材も用いる（言語としての理解を完璧にできなくても感じ取る）
- 2) 専門職としての物事の見方を伝える工夫
 - ① 課題はグローバルスタンダードで設定する（各課題に取り組んでいれば、確実に単位習得できる仕組み）
 - ② 小児を専門としない場合にも自らのキャリアや人生との関連を示す
 - ③ 世界から見た日本、日本から見る世界の視点の動きを意識し、多角的に事象を理解する方法を伝える
- 3) 学生が安心できる環境づくりのための工夫
 - ① 課題の伝達を文章および、視覚的に伝える
 - ② 講義時間を構造化する（いつも同じ流れで進行する）
 - ③ 開始と終了時間を厳守する
- 4) 主体的な学びの促進する工夫
 - ① 基礎的な知識を身につけるために必ず教科書を用いた学習ノートを設定する
 - ② グループワークを取り入れる
- 5) 各単元で何を学んでいるのかを明確にする工夫
 - ① 講義開始にかならず小テストを行う（前回講義の理解および国家試験問題の理解）
 - ② 講義最後10分間は当該講義の振り返りの時間とし、自分の学びを省察する時間をとる

(2) 総合的な学修成果達成のための工夫

1. プレゼンテーション、レポートにはルーブリック評価を講義初回に提示し、到達点を明示する。
2. 講義毎回の学生がel-Campusに記載したコメントには、1週間以内にコメントを返す。
3. 次回の講義冒頭で、学習目標をよく理解していると思える学生の振り返りをスライドに公開する
4. 学習ノートなどの課題は、まとめられていると判断した学生の提出内容を講義で教員が紹介する
5. レポート、プレゼンテーション、などエフォート、ストレスがかかる課題は、講義ごとに、提出日、課題の内容、課題達成のコツ、力の入れ方について伝える

4. 教育の成果

(1) 授業見学・授業アンケート等の内部評価

1. 学生の毎回/終了時の講義の振り返りコメント

- ・これまで「子ども」はひとくくりだったが、講義をとおして、年齢ごとに違いがあることを学んてますます面白いと思うようになった。
 - ・子どもはさわいでいて、よくわからないというのが正直なイメージだったが、子どももその子なりにいろいろ感じたり考えたりしているということがわかり、それを言語が未熟な分、周囲の大人が理解していく必要があるとわかった。
- 講義内容を理解し、子どもの理解に必要な基礎的な概念の理解ができるようになっていた。

ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際看護学部 名前：西村 直子 作成日：2024年1月10日

2. 小児看護学実習での学生の発言（アウトプット）

（幼稚園実習）

- ・子どもの遊びについて象徴あそびについて講義で学んだ。実際にままごとは女兒がするイメージだったが、男児も行っておりイメージできる年齢になっているのだと実感でした。
- ・片付けができる子どももいれば、できない子どももいて差があることもわかったし、そのうえで、自己中心性が幼児の特徴だと学んだが、ほかの子どもを手伝うことができる子どももいたため、成長発達は本当に個人差があるとわかった。

3. 小児看護学領域 教員からのフィードバック

週1回行っている領域ミーティングで毎講義の振り返りをしている（onenote 議事録・共有フォルダ議事録）

5. 改善への努力と今後の目標

【短期目標】

講義ごとの毎回の見直しを行い、各単元の修正および、科目全体の構成を行う。学生の動機づけをさらに強める工夫として、課題と到達目標や講義内容との関連を明確に説明する。領域内教員同士で、castle model をもとづいて、常にフィードバック行う。

【長期目標】

現在実施中の小児看護学実習での学生の実践を通して、2年次－3年次秋学期に履修する科目の教育効果の評価を行う。具体的には、学生の記憶に残りやすかった知識とそうでなかった知識について抽出する。また、なぜ記憶に残りやすかったかについても聞き取り、理解を深めておいてほしかったが、記憶に残りにくかった内容について教授方法の修正を行う。小児領域の科目を通して、「学ぶ楽しさ、充実感」を感じてもらうことで、卒業後も、自分で学習していくことが楽しいと思えることを目指しているため、5－10年後に卒業生が、学習をそのような姿勢で継続できているかをかわりながら、検証していく。

【エビデンスとなるもの（添付はありません）】

- ・シラバス
- ・講義資料 PPT スライド、コースガイダンス、ルーブリック評価
- ・講義で作成した学生の復習・予習ノートなどのワークシート、質問シートなど
- ・el-Campus に学生が入力した講義中のコメントおよび振り返り
- ・onenote・共有フォルダの会議録（小児看護学領域 教員からのフィードバック）

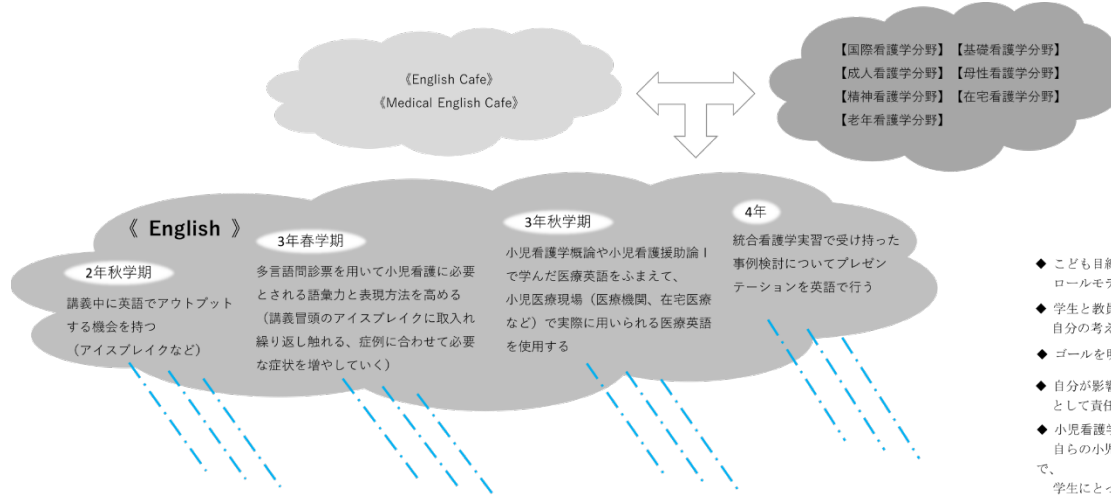
小児看護学分野 *Otemae Castle*

《MISSION》

小児看護学分野では革新的な方法による授業（講義・演習・実習）をプロデュースし、様々な場（療養場面、地域、国）で生活することもとその家族の将来性、多様性と普遍性を理解し、自らの実践を科学的根拠に基づいて実践できる看護学生を育てる



- ◆ こども目線からこどもの健康を第一に考えるChildren Firstのロールモデルとなる
- ◆ 学生と教員が対等な立場で議論する。相手がだれであっても自分の考えを自信を持って発言する大切さを学生と共有する
- ◆ ゴールを明示し、学生が失敗を恐れず挑戦する機会をつくる
- ◆ 自分が影響を与える存在であることを自覚し、プロフェッショナルとして責任を持って行動できるようにサポートする
- ◆ 小児看護学の革命児になる
自らの小児看護教育を内省し、革新的な教育方法を導入することで、学生にとって効果的な授業を展開する



《Education》

《看護師国家試験》合格

《医療英語検定4級》取得

《Education》

4年	こどもへの看護を創造する	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 臨床の疑問や興味をもとにリサーチエッセイを作成する ◆ 自身のリサーチエッセイをもとに看護研究の一連のプロセスを遂行することで看護実践と研究の関係をj知る ◆ 小児看護学領域におけるこどもとその家族のニーズと看護実践について、先行研究を用いて最新のエビデンスを収集し説明する 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ クリエイティブシンキングを通して、多面的にこどもと家族をアセスメントし論理的にケアを創造する ◆ 様々な場で生活するこどもとその家族の問題を包括的に捉え、多職種連携の中で看護師の役割を説明する
3年秋期	こどものもつ力を信じ引き出す	<ul style="list-style-type: none"> ◆ こどもとその家族の現在と将来の視点から、こどものセルフケアのニーズを系統的に捉える方法を学び、こどもへのケアを実践する ◆ こどもの安全の視点から、こどもの特性およびこどもの生活環境 (ひと・もの・場所) を把握し、それぞれのこどもに合わせた効果的な方法で安全を確保する 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ こどもの発達視点から、こどもとその家族から得た情報と診療データを文献と照らし合わせ根拠に基づいたアセスメントを行う
3年春期	こどものもつ力を知る	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 小児看護領域で一般的な事例を通して最善の看護を計画する ◆ プレバレーション、ディストラクションを通してこどもの持つ力を引き出す方法を考える 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 小児看護に必要とされる看護技術について根拠をふまえて演示することができる (VS、身体計測優先)
2年秋期	こどもに関心をもち 自分のこども観を発見する	<ul style="list-style-type: none"> ◆ こどもの権利条約、WHOやユニセフの統計を通して世界のこどもの状況を身近な問題として考える ◆ 地域に暮らすこどもの観察を通して発達段階と発達課題を理解する 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 保護者向けのリーフレット作成を通して予防接種、発達課題 (身長、体重、頭囲、胸囲)、離乳食についての知識を深く理解する
関連分野	看護専門職者としての基盤を作る		
	基礎分野 基礎専門分野 専門分野		

《Global》

2年秋学期

保護者向けのリーフレット作成を通して、こどもと家族の多様性について考える

3年春学期

文化的背景を加味したロールプレイ (英語) を通じて、こどもとその家族の不安を軽減する方法を考える

3年秋学期

1
臨床実習において、文化的、社会的、歴史的な視点からグループディスカッションを行い、多様性のある「こどもと家族」への看護を考え表現する

4年

外国人患者やその家族をはじめとした、病院における普遍的かつ多様なニーズを尊重した環境づくりを考える

